



## 年間第 21 主日 (ルカ 13:22-30)

どこで、狭い戸口から入ろうと努力しますか

「狭い戸口から入るように努めなさい。」(13・24) イエスの招きは、「できればそうしなさい」ではなく、狭い戸口の先にしか、主人と喜びを共にすることはできないという強い招きです。自分のこととして受け止めるきっかけを探しましょう。

リオデジャネイロオリンピックではたくさんの素晴らしい試合を見ることができました。中でも女子レスリングは感動を味わいました。惜しくも銀メダルで終わった選手は、このオリンピック決勝で敗れるまで、公式戦 208 連勝というとてつもない記録を打ち立てていたそうです。たとえ銀でも、メダルの重みが違うと思いました。

これは、今週の朗読でイエスが語っておられる「狭い戸口」に通じる体験かもしれません。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」たとえば 200 連勝してみないとわからない難しさがあるわけです。あるいは年間 60 本のホームランを打つてみないと見えない世界があるのだと思います。それぞれの立場で体験できる「狭い戸口」の先に神が用意しているものを体験してみないことには、わたしたちは軽々しく口にできないのだと思います。

苦い思い出があります。初めての教会で数年が経ったときでした。わたしはその教会で聖歌の奉仕をしてくださっている聖歌隊の練習担当でしたが、この方々に生意気なことを言ってしまい、主任神父さまはじめ、先輩の助任神父さまにも迷惑をかけたのでした。聖歌隊はいつになっても新しいメンバーが加わらず、このままでは先細りしていくばかりでした。そこで奮起を促そうと思い、結論だけ申しますと「わたしはいつまでも皆さんの子守をするつもりはない」と言ったのです。

この発言が炎上しまして聖歌隊から猛抗議を受け、「わたしたちはもうお手伝いしたくありません。指導してくれる司祭を変えてください」とそれはもう大変なことになりました。結局わたしは責任を取って聖歌隊の指導を外され、先輩の助任司祭が指導をすることになります。

この時主任司祭はわたしにこう言って反省を促しました。「あのなあ。60 歳にならないと言えないこともあるんだぞ。言っていることがどれだけ重いことか、考えてものを言いなさい。」最初で最後、当時の主任司祭から叱られた体験でした。

今になって考えると、主任司祭が言いたかったのは「お前が主任司祭を 25 年くらい務めてみないとわからないこともあるんだぞ」そういうことだったと思います。確かに、主任司祭を 25 年務めるころが 60 歳になるころです。そこまでの経験を踏まえてものを言う場合と、経験もないのに言うのとでは、言葉の重みは全く違ってきます。主任司祭の一言は、「狭い戸口」を通り抜けた司祭の、重みのある言葉でした。

どんな時代にも、親の世代よりも子供の世代が高い教育を受けるものです。すると子供は親よりも広い知識を基にして意見することになり

ます。ですが高い教育を受けているだけでは「狭い戸口」を通った人の知恵や言葉にはかなわないのではないのでしょうか。

わたしは母親から、「世の中に絶対ということはない」と教えられました。母は中学までしか教育を受けていません。大学を卒業し、さらに高度な専門教育を受けたわたしとは比較になりません。しかし、「世の中に絶対ということはない」という教えは、厳しい社会をくぐった人だからこそ言える言葉であり、わたしにはとてもありがたい言葉でした。

「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」（13・26）たとえ話の中で家の主人から締め出しを食らった者たちが主人に懸命に食い下がっています。主人はこの人たちの本性を見抜いています。調子のよい時だけ顔を出し、日ごろは主人の思いに背を向けて生きてきたのです。

「お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ」（13・27）彼らは「狭い戸口」を避けて日々を送ってきたのです。いざという時に、この「狭い戸口から入る」努力をしたかどうか問われるのです。

たとえばそれは、日々の祈りや、聖書に親しむ努力などです。「ご一緒に祈りをしましたし、聖書講座にも行きました。」それはそうかもしれないかもしれませんが、祈りをしたことがある、聖書講座に行ったことがあるだけでは、「狭い戸口から入る」努力とは言えないのです。

今日も明日も、欠かさずに朝夕祈る。これは並大抵のことではありません。でも誰の目にも止まらないかもしれません。しかし神は、「狭い戸口から入ろうと努力する」この人々を見ておられるのです。

新約聖書は、480 ページの書物です。1日1ページ読むなら、1年ちょっとで読み終えます。1日2ページ読む日があれば、1年で読み終えるのです。朝晩の祈りもしない、食前食後の祈りもしない。そんな家庭の皆さんには、食事の前に聖書を1ページ読むことを勧めます。

食事は365日欠かさずするでしょうから、それに合わせて聖書を1ページ読むなら、その家の人々は「狭い戸口から入る努力をする人」です。その家の人々は、「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」と弁解じみたことを言わなくとも、必ず主人の宴に招かれることでしょう。

わたしたちは必ず、「狭い戸口から入る」ことを求められます。狭い戸口の先には、招いてくれた主人と喜びを共にするのです。わたしはどこで、狭い戸口から入ろうと努力するのでしょうか。このミサの間に考えることにしましょう。